



2014年11月15日 発行

2014年秋号

<第28号>

編集・発行/社会福祉法人ワークスユニオン 代表/池田真樹 〒551-0001 大阪市大正区三軒家西1丁目17-18 TEL.06(6556)0881 FAX.06(6556)0882 info@works-union.org http://works-union.org/taion.html

節約生活

私は、いろんな事情がありまして、2014年4月1日より、パークハイツに入りました。

最初はわからないことがありましたが、いまは楽しいことがあります。唯一楽しいのは、清掃&節約です。

お風呂の残り湯で洗たく機の中に入れて、トイレにもバケツを使って水を再利用しています。ちよつと部屋を空けるときも、電気を消してから出ます。(もちろん戸じまりをします)

家では家族がいるので、自分の自由にはできないけれど、パークハイツではできるようになって、楽しいです。

私は将来、世の中の人を助ける人間になりたいです。

末吉 明子

あなたを支える

(高齢期の支援)

わが国は急激に「超高齢化社会」へと突き進んでおり、高齢期を迎える障害を持つ人の支援の有り方についても、検討課題となっている。

一生涯に亘るトータル支援を理念として掲げる私たちは、この「利用者の高齢化」に、真摯に向かい合い高齢期を迎えた利用者の「充実した生活」を目指さなければならない。

国の制度の方向性如何によっては、「障害福祉」だけでなく「高齢福祉」にも私たちは足を踏み入れなければならないのかもしれない。

ともかく今回は現場の担当者、私たちフックスユニオンの高齢期を迎えた利用者の支援の現状と課題や彼らの「想い」について報告してもらおうと思う。

(南石)

(生活支援の現場より)

昨年の十月、ワークスユニオンのグループホームは、ある一人の六十代男性の利用者さんを迎え入れました。その方は他の利用者さんよりも、より日常的な見守りが必要でした。

グループホームに移ることになりました。

ワークスユニオンの日中の事業所は以前から利用していた方なので、私も同じ事業所で一緒に働いたことがあります。

しかしグループホームに引越した初日、数年ぶりに会話を交わすと、はじめは私の名前を思い出せない様子でした。表情や動きからも、この数年間での変化を感じました。始終うつむき加減で、新しい環境に身を投じることへの不安や緊張もあったのだと思います。

そんな中でも、幸いグループホームには同じ事業所に通っていたり、昔から顔見知りの利用者さんがたくさんおり、皆さん食堂などで顔を合わせるとよく声をかけてくれました。そのおかげもあり、日に日に表情がほぐれていったように思います。

居室は以前高齢化の支援に備えて浴室やトイレを改装した三〇一号室を使用し、

更にその中に新たに増設した宿直室に、支援者が寝泊りできるようにしました。

これで夜中に出て行くこととしてもすぐに気付くことができ、夜間や明け方、トイレ介助などの身の回りの支援もしやすい環境になりました。ストレスにならないよう程良く距離をとりながら、職員やヘルパーで代わる代わる見守りや必要な介助を行っています。

はじめの数週間は時折フラツと出て行こうとするところがありました。今ではすっかり落ち着き、不安定になることもありません。

ここが自分の居場所なんだという安心感を抱けているのなら、とても嬉しく思います。

昨年度はもう一人、六十代の利用者さんが入居されました。その他にも、もうすぐ還暦を迎えようとしている方がチラホラ出てきています。

もちろん、還暦になったからと言って急に何かが変わるわけではありません。変わらず元気で快活な利用者さんの方が多いのです。

しかし、「なんとなく歩幅の遅くなったな」「ちよつと忘れっぽくなったかも」と、ふと気付けば健康・体力面や認知的な面において、少しずつ変化が見られるのも事実です。

そして、これまでなかった支援や介助が必要になることもあります。その変化に職員が戸惑い、自分達の知識・力不足を感じることもありますが、その都度、試行錯誤しながら力をつけていくしかないのだと思

ます。

いずれ、今よりももっと厚い職員配置や体制、設備もしかすると建物自体が必要になってくるかもしれない。利用者さんの変化にあわせて、形を整えていくこと。そして何よりも、「利用者」の一生を支えるために、職員が様々な面での変化を受け入れ、その覚悟を持ち続けることが大事ではないかと思っています。

(野々村)

(日中支援の現場より)

日中事業所の中では「匠」が、平均年齢が一番高く、最高齢で六十五歳の方が在籍しています。平成二十四年には、就労継続支援B型事業所から生活介護事業所に移行しました。

生活介護のサービスに移行した経緯は、利用者さんの高齢化が大きく、作業だけで過ごす事が難しくなってきたことや、年齢による

サービスの変更が出来なくなる事、人数が増え手狭になってきたことも挙げられます。利用者さんの心身の活性化を目指し、作業以外の活動も取り入れています。



「匠」は、高齢の方ばかりではなく、四十代から六十代の利用者さんが同じ空間で過ごしています。年齢差からくる問題は、ほとんど見られません。

それは以前よりも空間が広くなったことや、活動の内容が増えたことも大きいかも知れせん。そして、職員だけでなく、利用者さん同

士がお互いの事を理解し、配慮していることも大きいと思われます。

通路が狭くて通り難くしている人がいれば通路を空けてあげる、歩くのがしんどそうな人の昼食の配膳を手伝ってあげる、失禁がある人にはトイレの声をかけてあげる等、一緒に歳を重ねてきた中で出来た関係性があるからこそ、そういった配慮が出来るのだと思います。

そして、高齢の利用者さんに対しては日中、生活両面で連携して支援していくことが、今まで以上に重要になってくると感じます。六十五歳になる男性利用者さんは、日中は元々「匠」を利用していましたが、生活の場を、昨年の十月より他法人の入居施設から、ワークスユニオンへ移って来ました。

前よりも、人との関わりが増えたことや、本人への夜の見守り体制が手厚くなったこと、生活リズムが整ったことで、「匠」でも一週間を通して意識がはっきりし、活発になりました。以前よりも利用者さんや職員との関わりが増えまし、日中の中で何もしてない状態がなくなり、作業に参加したり、字や絵を描いたり自分から行動することが増えました。買い物や地域清掃などで外出する時にも、積極的に参加するようになっていきました。

環境の変化が利用者さんにとって負担になることもあると思いますが、それ以上に、今後の利用者さんの人生を考えた中で、高齢でも環境を変える必要がある場合がある事を感じさせられました。

今後、さらに利用者さんの高齢化が進み、医療的なケアが必要になった場合、

医師、看護師を導入すれば、今の事業所でも支援できるのか、それとも今とは違う環境が必要なのか、様々な年齢層の利用者さんがこれからも一緒に過ごすには、どうすればいいのか、考えなければならぬことは山積みです。



高齢期の支援については、「匠」だけの問題ではなく、ワークスユニオン全体で検討していかなければならない課題です。利用者さんが年を重ねても、安心して過ごせるよう、今後も日々模索していきたいと思っています。

(横田)



のもいやだからなのだ。
「お金を払わなければ、欲しい物は買えない。」
これだけ分っていたら充分。
お金を払えばお客様。迷惑をかけることはないし、お釣りもきちんとくれる。

自分の使えない小銭をゴミ箱に捨ててしまう人には、個人用の小銭入れを準備し、百円になったら両替する。買っただけ使ってしまう人には、毎日定額のお金を準備するなどの工夫を職員たちはそれぞれの利用者にあわせてしてくれている。

障害を持つ人の「財産管理」については、「成年後見人」や「安心サポート」等の制度もあるが、意外と使いづらい。

そんなものではなく、多額の資産を持たない知的な障害を持つ人たちが地域で暮らすためには、「金銭管理」については、こんなちよつとした工夫や支援が、一番重要なのだ。

職員紹介

高橋 博 (せい) 一 匠

ユニオンに入職して約1年半になる彼。「高橋」姓の職員が2名も在籍しており、呼び分けができないため職員間では「ひーさん」と呼ばれています。

送迎車が2台体制になった当初は、支援業務のほか朝夕の運転業務もこなすなどバワフルな一面も。

特技は、プラモデル製作。手先が器用で、1時間に3体ものプラモデルを作り上げるほどの実力だそうです。プラモ制作で培った器用さで、細かな部品の検品もお任せです。

そんな彼の休日は、日本橋を散策するとか。匠の利用者さんとの外出では、散策で見つけた安い模型店さんに向かい、利用者さんにも喜ばれているそうです。

高橋 路易子 (ろいこ) 一 匠

昨年の秋に、高橋姓の職員がもう1人入職しました。彼女も、いつの間にか自然と「ろーさん」と呼ばれるようになりました。

利用者さんと接すること「楽しい」と語る彼女は、持ち前の明るさで、利用者さんをはじめ、職員までも元気をもらっています。

ふうせんバレーのクラブ活動にも参加し、匠で利用者が見せる表情と大会に参加している時の表情が違うことに「驚きの連続」と話します。惜しくも試合に負け、落ち込む利用者にとっけと寄り添って話を聴く、母親のような投目も担い、「ユニオンラッシュ」に欠かせない一員です。(高橋慎)

編集後記

▼利用者さんと共に過ごす中で見えてくるものがあります。▼一日二日を大切に、同じ時間を過ごす中で感じる一人ひとりの息づかい。気持ちの波やこだわりが変化する瞬間。▼その瞬間を感じ、向き合い、関わることに、職員として、支援者としての醍醐味を感じるこの頃です。▼一人の支援者に見せる姿がその人の全てではありません。相手を見ながら、甘えてみたり、ピリリと気を引き締めてみたり。▼利用者さんにとっても、四六時中、いつも同じ人とはかり顔を突き合わせていては息が詰まるかもしれない。▼一ヶ所で一日の暮らしが完結するのではなく、日中と生活の場を分ける中で、その人らしい生活ができるのではないのでしょうか。これも「ユニオン流の支援」の一つのように思っています。(H)